筑紫女学園大学リポジト

Yaśovijaya on nayalak□a□a

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇野, 智行, UNO, Tomoyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/68

ヤショーヴィジャヤによるナヤの定義

宇　野　智　行

Yaśovijaya on *nayalakṣaṇa*

Tomoyuki UNO

0．序

白衣派ジャイナ学僧ヤショーヴィジャヤ・ガニ（ca. 1624-1687）による綱要書『タルカ・バーシャー』は、彼に至るまで発展を遂げたジャイナ教哲学の要点を、徹底的に言葉を選びつつ纏め上げた、言わば「ジャイナ教哲学の最終的エッセンス」と言ってよい。本書は、二千年にもおよぶジャイナ教学発展の最後のまとめであり、先師たちの様々な言葉を取捨選択した結果生まれたものである。したがって、そのテキストは、彼に先行するジャイナ教諸論書の「パッチワーク」とも言える。このような本書の性格を鑑みるならば、『タルカ・バーシャー』のジャイナ教哲学にとっての貢献は、それぞれの哲学的理論の進化・深化にあるのではなく、ヤショーヴィジャヤに先行する諸説の折衷・融合にあると言うことができる。

このようなヤショーヴィジャヤによる先行諸説の融合は、「ナヤ」（naya）についても顕著に窺うことが可能である。ジャイナ教の存在論は「積極的多面説」（anekāntavāda）とも称され、事物に無数の性質（ダルマ）を認め、多面性を付与する。このような多面性を単一の事物に承認することを保証するため、ジャイナ教は他学派には見られない「ナヤ」と呼ばれる特異な認識論を発展させた。ジャイナ教哲学におけるナヤは、古くは聖典文献類にもその萌芽が見られ、聖典注釈文献類やウマースヴァーティ以降の独立論書類においても、様々な解釈が展開されている。ジャイナ教思想史発展の最後尾に位置するヤショーヴィジャヤは、空白両派の数々の先師たちの解釈を参照しうる立場にあり、ナヤの定義に際しても先行諸説を明確に参考にしている。

本稿は、ヤショーヴィジャヤ著『タルカ・バーシャー』に見られるナヤの定義文が、先行するどのような文献を知的ソースとしているかを考察することにより、ナヤの定義に関わる発展史の一端を明らかにすることを目的とする[1]。特に、ナヤと「プラマーナ」（正しい認識根拠：pramāṇa）との関連[2]について、ヤショーヴィジャヤに至るまでの空白両派の見解の蓄積を裏付け

たい。

1．ナヤとプラマーナの生起順序

ヤショーヴィジャヤは、『タルカ・バーシャー』においてナヤを次のように定義する。

> ナヤとは、プラマーナによって既に決知された、無数のダルマを本質とする事物について、その一部を把握し、それ（一部）以外の部分を完全に否定することのない、特定の判断のことである。[3]

ヤショーヴィジャヤに先行するジャイナ教文献の中で、この定義文と完全一致するものは見出せない。ただし、定義文中のそれぞれの要素は、様々な先師たちの解釈の中に見出すことが可能である。

ヤショーヴィジャヤが言うように、ナヤの対象は「プラマーナによって既に決知された（pramāṇaparicchinna）、無数のダルマを本質とする（anantadharmātmaka）事物（vastu）」である。まずジャイナ教において、事物（実在）が無数のダルマ、すなわち無数の性質を持つことは言うまでもない。ここで問題となるのは、そのような事物のうち既にプラマーナによって決知されているものが、ナヤの対象となることである。

ナヤ説を解釈するに際して、プラマーナとの関連を明示したのは、ウマースヴァーティ（5世紀ごろ）の『タットヴァ・アルタ・スートラ』以降のことであろう。彼の「［ジーヴァなどの実在の］理解はプラマーナとナヤによる」[4]というスートラによって、プラマーナとナヤの両者が実在の理解に関わることが表明されて以降、これら両者の機能の区別が意識されることになったことが想像される。このプラマーナとナヤの関係を明示することを主導したのは空衣派の論者たちであった。両者の関係についての記述を文献に残した最初の論者は、プージュヤパーダ（6世紀ごろ）と考えられる。彼は、「［ジーヴァなどの実在の］理解はプラマーナとナヤによる（pramāṇanayaiḥ）」というスートラの語順についての反論を導入して次のように言う。

> 【反論】‘naya’という語は［‘pramāṇa’という語］より音節が少ないので、前に述べられるはずであろう。
>
> 【答論】そのような過失はない。プラマーナは優れているから、前に述べられるのである。そして、優れているということは、すべての面でより強力である。
>
> 【反論】どうして［プラマーナは］優れているのか。
>
> 【答論】［プラマーナは］ナヤによる考察が生じる源泉であるから。というのも、［先師によって］次のように言われているからである。「ナヤとは、プラマーナによって［ものが］把握された後、その特定の変容に基づいて、ものを確定することである。」[5]

この言明には、プラマーナとナヤの価値付け、および対象認識についての「プラマーナ→ナヤ」という順序が明確に示されている。プラマーナによって対象が把握されて初めてナヤが発動するので、ナヤはプラマーナなしにはあり得ない。したがって、ナヤの対象は、必ずプラマーナの対

象でなければならない。このことをプージュヤパーダは「プラマーナはナヤによる考察が生じる源泉」と述べて、プラマーナの先行性および優位性を明示したのである。なお、プージュヤパーダはこの両者の関係を先師の言葉を引用することによって補強していることに着目すれば、彼以前にプラマーナの先行性を説いた論師が存在することは明らかである[6]。この空衣派論師の名は不明ではあるが、ナヤとプラマーナの前後関係については、彼が先鞭をつけたことは明白であろう。

このプージュヤパーダの明記以降、アカランカ（ca. 720-780）、ヴィドゥヤーナンディン（9世紀）などの空衣派論者だけでなく、白衣派も含めた論理期以降の学僧たちは、両者の価値・順序についてこの解釈を完全に踏襲している[7]。事実、ヤショーヴィジャヤが直接参照したと考えられる『プラマーナ・ナヤ・タットヴァーローカ』において、著者デーヴァ・スーリ（ca. 1086-1169）はナヤ定義文中に「言語知というプラマーナによって既に対象とされたもの」（śrutākhyapramāṇaviṣayīkṛta）という句を導入している[8]。すなわち、ヤショーヴィジャヤに至るまでに、ナヤとプラマーナの価値付けおよび順序については、『タットヴァ・アルタ・スートラ』に対する空衣派注釈者たちの見解が大きな影響力を発揮し、空白問わず論理期の独立作品にこの見解が継承されたことは明らかなのである。

2．対象の一部を把握するもの

『タルカ・バーシャー』の定義によれば、ナヤは「事物の（vastunaḥ）一部を把握するもの（ekadeśagrāhin）」である。この事物の一部分を把握するというナヤの定義についても、ヤショーヴィジャヤが数々の先師たちの解釈をソースとしていることは明白である。まず、次のような白衣派論者たちの定義にもこのことは明示されている。

（1）ジナバドラ（ca. 505-609）：ナヤとは、複数のダルマを持つ事物を、一つのダルマによってまさに限定的に導きだすものである。そしてそれは七種である。[9]

（2）ハリバドラ（9世紀）：同様に、導き出すもの（nayana）がナヤである。もしくは、導きだす（nīyate）手段、導きだす場、導きだす根拠がナヤである。無数のダルマを本質とする事物の一部を決定するもの、という意味である。[10]

（3）シッダセーナ・ガニ（9世紀ごろ）：実に、複数のダルマを本質とする事物を一つのダルマによって考察するもの、［つまり］「これは常住、その限りのものである」もしくは「これは無常、その限りのものである」などという判断を伴って［事物を考察するもの］、それらがナヤであり、ナイガマなどであることが［後に］述べられるであろう。[11]

これらの白衣派文献の定義によれば、複数のダルマを持つ事物について、一つのダルマに焦点が当てられ、その一つのダルマを持つものとして事物が導出、決定されていることが理解できる。つまり、「常住」「無常」などという矛盾した複数のダルマを持ちうる事物に関して、「これは常住、その限りのものである」などというように一つのダルマのみによってその事物を考察、把握する

ものがナヤということができよう。

このようなナヤの「一部を把握する」という特質は、積極的多面説を奉じるジャイナ教にとっては当然のことと言える。すなわち、多面的な性質を持つ事物は、その内に矛盾する性質を孕み持っている。外見上「常住」「無常」という性質は相互に矛盾しており、同一の事物についての「これは常住である」「これは無常である」という二つの認識（言明）は相容れない。ところが、ジャイナ教ではこの矛盾した性質を可能ならしめる根拠として、ナヤという認識型を提示する。『タルカ・バーシャー』の定義に見られるように、ナヤとは「特定の判断」（adhyavasāyaviśeṣa）に他ならない。我々人間は、無数にあるダルマの全てを完全に網羅した形で対象となる事物を判断、つまり概念的に理解することは不可能であるから、判断の内容を特定化する必要がある。このことについては、ヤショーヴィジャヤ自身が『ナヤ・ウパデーシャ』において次のように述べている。

> ナヤとは、存在・非存在など［というダルマ］を具えた諸々のものについて、［特定の］観点に基づいて言明するものである。というのも、観点なしには［様々なダルマが］混在したものを判別することは出来ないからである。[12]

このヤショーヴィジャヤの言葉に明らかなように、ナヤとは「言明」つまり言葉に関わる認識型である[13]。ある対象について言明する際に、その対象が持つ無数の個々のダルマ全てを網羅的に言い表すことは出来ない。したがって、ある特定の観点（apekṣā）を設定し、その観点・視点から対象についての言語的判断を下す。このように、ナヤとは認識者にとっての「特定の判断」「特定の観点に基づく言明」（apekṣāvacana）であり、「人間の特定の意向」（abhiprāyaviśeṣa）とも言える[14]。認識者はある特定の意向・観点をもって一つの性質（ダルマ）に焦点をあて、その事物の一部（一側面）を把握、判断するのである。

さらにこの「一部を把握する」というナヤの特質は、プラマーナとの対比をもって両者の優劣を明確にするためにも用いられている。この点から見たプラマーナとの対比もまた、空衣派論者たちが嚆矢となって、ナヤ解釈に導入されたことが明らかである。再びプージュヤパーダの言明を考察してみよう。

> さらに、プラマーナは［実在の］全体を対象領域としているので［優れているのである］。そして同じように、［先師によって］次のように言われている。「全体の指示はプラマーナに依存し、部分の指示はナヤに依存する」と。[15]

ここではプラマーナが全体を指示し、ナヤが部分を指示するという対象領域の相違によって、前者に優位性があることが明示されている。つまり、プラマーナが「これはXである」という全体的言明を為し、ナヤは「このXはYというダルマを持つ」などという部分的言明を為すと言ってよい。ここでも、プージュヤパーダは先師の韻文を引用しており、彼以前のある空衣派論師がプラマーナとナヤの対象領域の相違を問題としていることを窺わせる。このある空衣派論師によれば、ナヤは多数のダルマを持つ事物の一部分（一つのダルマ）に焦点を当てて言葉によって指示するものであるが、その前段階としてプラマーナによる事物全体の指示が先行することになる。このある空衣派論師以降、言語知としてのプラマーナがナヤに先行すること、前者が事物全体、

後者が事物の一部を対象領域とすること、の二点は空白両派を問わず継承されていく[16]。したがって、プラマーナの優位性は「プラマーナがナヤに先行すること」「プラマーナが事物全体を対象領域とすること」の二点に基づいて確立されているのである。

３. 一部以外の扱い

積極的多面説によれば、複数のダルマを持つ事物の認識・言明は、「意向」「観点」を設定することにより無矛盾性を確保することが可能となるが、一方において単一の「意向」「観点」のみに基づく認識・言明は「一面的」(ekānta) という烙印を押されることとなる。この問題についても、空白両派の論師たちは看過することはない。例えば、両派から先師と認められるシッダセーナ・ディヴァーカラ（４－５世紀ごろ）は『サンマティ・タルカ』において次のように言う。

> したがって、あらゆるナヤは自己の見解［のみ］に執着する誤った見方である。しかしながら、［それら諸々のナヤが］相互に依存するならば、正しきものとなる。[17]

シッダセーナ・ディヴァーカラは実体的ナヤ・様態的ナヤの二分法を提示し、前者をサーンキャ学派、後者を仏教徒に配当している[18]。そして、これら他学派の諸見解が誤りであること示すのである。彼によれば、諸々のナヤは、自身の見解に執着する「誤った見方」(micchādiṭṭhi, *mithyādṛṣṭi) と看做される[19]。つまり、それぞれのナヤは事物の一部を把握するものでありながら、その一部の理解だけに執着した視点は、一面的であり正しくない。一方、それぞれのナヤが「相互に依存する」(aṇṇoṇṇaṇissia, *anyonyaniśrita）ならば、正しい知がもたらされることとなる。

このことは、白衣派のジナバドラによっても、同じように説明される。

> 複数のダルマを持つ事物について、その一部についても［事物］全ての理解がある［と思い込んでしまう］。したがって、［諸々のナヤは］個々には誤った見方である。［しっぽや脚などという］ゾウの一部について、［ゾウ全体を把握したと思い込む］盲人のように。一方、統合された［諸々のナヤ］は、あらゆる様態を持つ事物を理解せしめるので、正しい［見方］である。全てのゾウの部分を把握する目の見える人のように。[20]

ここでは、個々のナヤを「ゾウの一部だけを触覚に頼って把握する盲人」、統合されたナヤを「ゾウの全体を視覚によって把握する目の見える人」に譬えており、いわゆる「群盲撫象」の比喩が用いられている。つまり、個々のナヤは自身が認識する一部以外は全く見えておらず、その一部の認識をもって全体を認識したと思い込んでしまうので、誤った見方と看做される。一方、統合されたナヤは対象が様々な様態を持つことを理解するので正しい見方とされる。このジナバドラの言明はシッダセーナ・ディヴァーカラのそれと軌を一にするが、問題となるのは「統合された」(samudita）という語であろう。

『サンマティ・タルカ』に対する注釈者アバヤデーヴァ（白衣派、ヴィクラマ暦10世紀ごろ）によれば、「相互に依存する」という語は、「相互に排除しあうことなく別だてされている」(parasparāparityāgena vyavasthita）と解釈される[21]。また、ジナバドラに対する注釈者マラダーリ・

ヘーマチャンドラ（ca. 1070-1130）は、直接「統合された」という語を説明することはないが、次のようにジナバドラの意図を纏めている。

> 排除することなく、他のナヤを考慮し、‘syāt’という語によって特徴づけられたナヤは、たとえ単一であっても正しく述べるものである。一方、排除を伴い、相互に考慮することなく、‘syāt’という語によって特徴づけられることのない諸々［のナヤ］は、たとえ多数であり統合されていたとしても、誤った見方に他ならない。以上が、ここでの意図である。[22]

この言明によれば、ナヤが単一であること、多数であることは問題とはならない。たとえ単一であろうとも、排除することがなく、他のナヤを考慮し、‘syāt’という語によって特徴づけられたものであるならば、そのナヤは誤りではない。つまり、ジナバドラが言う「統合されたナヤ」とは、単なるナヤの集合ではなく、他のナヤの存在を前提とした上で、他のナヤによる理解を否定・排除しないものと言えるであろう。また、‘syāt’という語はジャイナ教においては「ある点から見れば」「ある意味では」を意味し[23]、絶対的見解に陥ることを避けるために文章に導入される不変化詞のことである。したがって、ナヤは事物の一部のみを対象としながらも、その一部以外を排除することなく、「ある点から見れば、ゾウはロープのようである」「ある点から見れば、ゾウは柱のようである」という理解をもたらす。この「ある点から見れば」（syāt）という語は、自己の見解を絶対的なものであるとする執着を避ける文言であり、他の理解の存在を想定した上でのただし書きとも言える。つまり、他のナヤによる理解を否定することなく、一部の認識であることの自覚を伴うナヤこそが、正しい見方と捉えられているのである。

このような「他のナヤの見解を否定、排除しない」というナヤの特徴は、次のような空衣派論者たちの文献にも確認することができる。

> （1）サマンタバドラ（6－7世紀頃）：【反論】誤りの集積は誤りであろう。【答論】［そうではない。］我々の見解では、絶対的な誤りは存在しない。［相互に］考慮しない諸々のナヤは誤りであるが、それら（ナヤ）は［相互に］考慮するものである。［なぜなら、それらの対象の集積である］事物は有効な働きを為す［からである］[24]。
>
> （2）アカランカ：特殊と普遍を本質とする知の対象について、特殊や普遍［を理解しようとする］複数の意図がある。それら［複数の意図］のうちナヤは［相互に］考慮することによって特徴づけられ、劣ったナヤは［相互に］考慮しないことによって特徴づけられる。[25]

サマンタバドラは上記のように、個々のナヤが誤りであるならばそれらが集積したとしても結局は誤りであるという反論を導入し、それぞれが他のナヤを相互に考慮するならば誤りではないというナヤの特徴を明言している。このような他のナヤを否定することなく考慮するという考え方は、白衣派文献とも共通しており、またアカランカ以降の空衣派論者たちにも引き継がれている。この論点におけるアカランカの第一の貢献は、上記のように他のナヤを考慮に入れないナヤを「劣ったナヤ」（durnaya）と名付け、ナヤと峻別したことにある[26]。

さらに、アカランカはサマンタバドラの言明を注釈して次のように述べている。

［他のナヤを］考慮しないこと（nirapekṣatva）とは、対立するダルマを否定することである。［他のナヤを］考慮すること（sāpekṣatva）とは、無関心のことである。そうでなければ、プラマーナとナヤの違いがないことになってしまうから。というのも、プラマーナは別のダルマを取ること、ナヤは別のダルマに無関心であること、劣ったナヤは別のダルマを排斥することを特徴としており、また、それ［ら三つ］以外の［知の］あり方はあり得ないからである。[27]

このアカランカの記述には、ナヤと劣ったナヤおよびプラマーナとの相違がより明確に説かれている。すなわち、プラマーナの対象は事物全体であるので、ナヤが対象とする一部以外の部分もその対象に含まれる。したがって一部以外の部分、つまりある一つのナヤが焦点をあてるダルマとは異なる諸々のダルマについても、それを「取ること」（ādāna）は当然である。このプラマーナと対極に位置するものはナヤではなく、劣ったナヤである。劣ったナヤは、ある特定のダルマのみに執着し、別の諸々のダルマを「排斥すること」（hāni）を特徴とする。一方でナヤは、「取ること」「排斥すること」という別のダルマに対する能動性を停止していると言ってよい。ナヤは他のダルマについて「無関心」（upekṣā）であり、他のダルマを積極的に把握することもなく、また否定することもない。このように、アカランカの第二の貢献は、事物の理解の仕方について三つのあり方を提示し、正誤のナヤの峻別だけではなく、プラマーナをも含めてその相違を示したことである。この三者の区別をアカランカおよびヴィドゥヤーナンディンの記述に従って具体的な知の内容の形で示すならば、次のようになるであろう。

（1）プラマーナ：事物のダルマXおよび対立するダルマ非Xについての知

（2）ナヤ：事物のXというダルマについての知

（3）劣ったナヤ：事物のXというダルマ以外の否定[28]

プラマーナは事物の全体を対象とするので、その事物が持つあらゆるダルマについての知をもたらす。ゆえに、Xと非Xで表しうる全てのダルマがプラマーナの対象領域と言える。一方、ナヤはXのみを知るものであり、非Xについての積極的な肯定や否定はない。劣ったナヤはナヤと同様にXを対象としているが、非Xを否定してしまうという点で両者は相違する[29]。

このアカランカの貢献は、ヤショーヴィジャヤも含めた後のジャイナ教論者たちに多大な影響を与えている。例えば、白衣派の『タットヴァ・アルタ・スートラ』注釈者であるハリバドラとシッダセーナ・ガニは、「他の人たち」（apare）の見解として、相互に考慮しないナヤを「疑似ナヤ」（nayābhāsa）とする解釈を紹介しており、この「他の人たち」は明らかにアカランカをはじめとする空衣論者と看做すことができる[30]。また、白衣派のデーヴァ・スーリはナヤの定義文中に「それ以外の部分に無関心な態度で（taditarāṃśaudāsīnyataḥ）という限定句を導入し、アカランカに倣って他の部分に対する非能動性を強調する。さらにはアカランカの言う「劣ったナヤ」を「疑似ナヤ」と名称を変えた上で、「別の部分を否定するもの」（itarāṃśāpalāpin）[31]と定義している[32]。

ヤショーヴィジャヤは、ナヤの説明に際してこのデーヴァ・スーリの言明を直接利用した

と思われるが[33]、彼の定義文中では「それ（一部）以外の部分を完全に否定することのない」(taditarāṃśāpratikṣepin)という限定句こそがアカランカの意図を継承するものであろう。また、『タルカ・バーシャー』においては、個々の疑似ナヤの定義において「～を否定するもの」(-pratikṣepin / -apalāpin）という表現を多用しており[34]、ナヤと疑似ナヤの峻別法についても空衣派による解釈の影響が認められるのである。

4．まとめ

以上のように、ヤショーヴィジャヤ著『タルカ・バーシャー』のナヤ定義文には、空白両派の様々な解釈が盛り込まれている。これを時系列に沿って纏めるならば、次のようにナヤの定義の変遷を示すことができる。

（1）シッダセーナ・ディヴァーカラ（空白、4－5世紀ごろ）によれば、すべてのナヤは誤った見方である。ただし「相互に依存するナヤ」は正しい、という記述が見られる。彼の『サンマティ・タルカ』では、ナヤとプラマーナの関係について詳述されることはない。

（2）ウマースヴァーティ（空白、5世紀ごろ）の『タットヴァ・アルタ・スートラ』において、初めてプラマーナとナヤの両者が対象認識に関わることが明言される。ただし、ウマースヴァーティは自注においても、両者の相違点を示さない。

（3）白衣派のジナバドラ（ca. 505-609）は、ウマースヴァーティのスートラを知りながらも、基本的には『サンマティ・タルカ』のナヤ解釈を踏襲している。彼はナヤを、複数のダルマを本質とする事物を一つのダルマによって限定的に導きだすもの、とする。また、シッダセーナに従い、「他のナヤを考慮し、排除しない」という形であるならば、ナヤは誤った見方とはならないことを示す。

（4）プージュヤパーダ（空、6世紀ごろ）の『サルヴァ・アルタ・シッディ』中に見られる、ある空衣派論師は初めて「プラマーナはナヤに先行する」「プラマーナは事物の全体を指示し、ナヤは部分を指示する」という二点を明らかにしている。またプージュヤパーダ以降、この二点によってプラマーナの優位性が説かれるようになる。

（5）空衣派のアカランカ（ca. 720-780）は、プージュヤパーダやサマンタバドラの説を踏襲すると共に、ナヤと劣ったナヤを区別する。また、ナヤが対象とする一部のダルマとは別のダルマについて、プラマーナがそれを取り、ナヤは無関心であり、劣ったナヤは排斥する、という三者の相違を初めて示したのもアカランカである。

（6）アカランカ以後、空衣派はもちろん白衣派の論者たちも、彼の影響を大きく被ることになる。白衣派においても、ハリバドラ（9世紀）やシッダセーナ・ガニ（9世紀ごろ）は空衣派解釈を自らの注釈文献中に紹介している。デーヴァ・スーリ（白、ca. 1086-1169）は、ヴィドゥヤーナンディン（空、9世紀）の著作を通じてアカランカ説を踏襲し、ナヤの別のダルマに対する非能動性、劣ったナヤという概念を採用している。このアカランカ説の踏襲は、マッリシェー

ナ（白、13世紀）にも確認できる。

（7）ヤショーヴィジャヤは、ナヤの「事物の一部を把握」するという基本的機能については、白衣派の伝統に則っていると言ってよい。ただし、「プラマーナによって既に決知された」という句、「それ（一部）以外の部分を完全に否定することのない」という句については、空衣派の影響が大きい。また、疑似ナヤをナヤと区別することも同様である。これらの影響は、直接的にはデーヴァ・スーリの著作を利用したことが要因であるが、「ある空衣派論師→プージュヤパーダ→アカランカ→ヴィドゥヤーナンディン→デーヴァ・スーリ→ヤショーヴィジャヤ」という順にナヤ解釈が継承・蓄積されたことは明らかである。

【略号および参考文献】

ADSV(H): *Anuyogadvārasūtravṛtti*(Haribhadra Sūri): Muni Jambuvijaya(ed.), *Anuyogadvārasūtram*. 2Vols., Jaina Āgama Series No.18(1,2), Bombay: Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya,1999, 2000.

ĀM: *Āptamīmāṃsā*(Samantabhadra): Gajādhara Lal Jain(ed.), *Āptamīmāṃsā Pramāṇaparīkṣā ca*. Sanātana Jaina Granthamālā Nos. 7-8, Kashi: Śrī Pannālāl Jain, 1914.

ĀMV: *Āptamīmāṃsāvṛtti*(Vasunandin): See ĀM.

AŚ: *Aṣṭaśatī*(Akalaṅka Deva): See ĀM.

AS: *Aṣṭasahasrī*(Vidyānandin): Vaṃśīdhar(ed.), *Aṣṭasahasrī*. Sholapur: Ramchandra Natharangji, Gandhi, 1915.

Dixit, K. K.

1971 *Jaina Ontology*. L. D. Series No.31, Ahmedabad: L. D. Institute of Indology.

Fujinaga, Sin（藤永伸）

1985 「*Syādvāda*の分析と批判」、『哲学』第37集、pp.117-130.

1990 「サマンタバドラ研究（3）」、『都城工業高等専門学校研究報告』24、pp.73-79.

JTBh: *Jainatarkabhāṣā*(Yaśovijaya Gaṇi): Sukhlal Sanghavi, Mahendra Kumar Shastri, Dalsukh Malvania(eds.), *Jainatarkabhāṣā of Mahopādhyāya Śrī Yaśovijaya Gaṇi with Tātparyasaṅgraha*. Singhi Jain Series No.8, Ahmedabad, Calcutta: Siṅghi Jaina Granthamālā, 1938.

LT: *Laghīyastraya*(Akalaṅka Deva): Mahendra Kumār (ed.), *Akalaṅka Granthatrayam*. Singhi Jaina Series No.12, Ahmedabad, Calcutta: Singhi Jaina Granthamālā, 1939.

LTV: *Laghīyastrayasvopajñavivṛti*(Akalaṅka Deva): See LT.

Matilal, B. K.

1981 *The Central Philosophy of Jainism*(*Anekānta-vāda*). L. D. Series 79, Ahmedabad: L. D. Institute of Indology.

NU: *Nayopadeśa*(Yaśovijaya Gaṇi): *Nyāyaviśārada-Nyāyācārya-Mahopādhyāya-Śrīmad-Yaśovijayagaṇiviracitas Svopajñavṛttyupetaḥ Nayopadeśaḥ*. Śrī Ātmavīra Grantharatnamālā 6,

Bhavnagar: Śrī Ātmavīra Sabhā, 1919.

PKM: *Prameyakamalamārtaṇḍa* (Prabhācandra): Mahendra Kumār (ed.), *Prameyakamalamārtaṇḍa by Shri Prabhācabdra*. Sri Garib Dass Oriental Series No.94, Delhi: Sri Satguru Publications, 1990[3] (1st. ed. in 1912).

PNT: *Pramāṇanayatattvāloka* (Deva Sūri): *Śrīmad Vādidevasūriviracitaḥ Pramāṇanayatattvālokālaṅkāraḥ tadvyākhyā ca Syādvādaratnākaraḥ*. 5Vols., Poona: Motilal Lāghajī, 1927-1931 (Reprint, Delhi: Bhāratīya Book Co., 1988).

SAS: *Sarvārthasiddhi* (Pūjyapāda): Phūlacandra Śāstrī (ed.), *Śrīmadācārya Pūjyapādaviracitā Sarvārthasiddhiḥ*. Jñānapīṭha Mūrtidevī Granthamālā: Sanskṛta Granthāṅka 13, New Delhi: Bhāratīya Jñānapīṭha Prakāśan, 1989[4] (1st. ed. in 1944).

SM: *Syādvādamañjarī* (Malliṣeṇa): A. B. Dhruva (ed.), *Syādvādamañjarī of Malliṣeṇa with the Anyayoga-Vyavaccheda-Dvātriṃśikā of Hemacandra*. Bombay Sanskrit and Prakrit Series No. LXXXIII, Bombay, 1933 (Reprint, Delhi: Akshaya Prakashan, 2005).

STP: *Saṃmatitarkaprakaraṇa* (Siddhasena Divākara): Sukhlal Sanghavi and Becardas Dosi (eds.), *Ācāryaśrī Siddhasenadivākarapraṇītaṃ Saṃmatitarkaprakaraṇam*. 5Vols., Ahmedabad: Gujarāt Purātattva Mandir, 1924-1931 (Reprint, Kyoto: Rinsen Book Co., 1984).

SVin: *Siddhiviniścaya* (Akalaṅka Deva): Mahendra Kumār (ed.), *Siddhiviniścayaṭīkā of Śrī Anantavīryācārya, the Commentary on Siddhiviniścaya and its Vṛtti of Bhaṭṭa Akalaṅka Deva*. 2Vols., Jñānapīṭha Mūrtidevī Jaina Granthamālā, Sanskrit Grantha No.22, 23, Kashi: Bhāratīya Jñānapīṭha, 1959.

SVR: *Syādvādaratnākara* (Deva Sūri): See PNT.

TARV: *Tattvārtharājavārttika* (Akalaṅka Deva): Mahendra Kumār Jain (ed.), *Bhaṭṭākalaṅkadevaviracitam Tattvārthavārtikam*. 2Vols., Jñānapīṭh Mūrtidevī Jaina Granthamālā, Saṃskṛta Granthāṅka No.10, 20, Varanasi: Bhāratīya Jñānapīṭha, 1953, 1957.

TAŚV: *Tattvārthaślokavārttika* (Vidyānandin): Pt. Manoharlāl (ed.), *Śrīmadvidyānaṃdisvāmiviracitaṃ Tattvārthaślokavārtikam*. Gandhīnātāraṃga Jainagranṃthamālā, Mumbai: Ramchandra Natharangji, Gandhi, 1918.

TAS: *Tattvārthasūtra* (Umāsvāti): Hiralal Rasikdas Kapadia (ed.), *Tattvārthādhigamasūtra, Part I*. Devacandra Lālbhai Jainapustakoddhāra Fund Series no.67, Bombay, 1926.

TASṬ (H): *Tattvārthasūtraṭīkā* (Haribhadra Sūri): *Śrī Tattvārthasūtram*. With Auto-Commentary, Haribhadra's Ṭīkā, Ratlam: Ṛṣabhadevjī Keśarīmaljī Jaina Śvetāṃbara Saṃsthā, 1936.

TASṬ (S): *Tattvārthasūtraṭīkā* (Siddhasena Gaṇi): See TAS.

TBV: *Tattvabodhavidhāyinī* (Abhayadeva): See STP.

Uno, Atsushi (宇野惇)

1965 「ジャイナ教のスャードヴァーダ—Syādvādamañjarī §23-25—」、『インド学試論集』VI-VII、

pp.105-121.

1990　「ジャイナ教のナヤ説」、『仏教学研究』第45, 46号、pp.29-50.

VĀBh:　*Viśeṣāvaśyakabhāṣya*（Jinabhadra Gaṇi）: Dalsukh Malvania（ed.）, *Ācārya Jinabhadra's Viśeṣāvaśyakabhāṣya with Auto-commentary.* 3Vols., L. D. Series, nos. 10, 14, 21, Ahmedabad, 1966-68.

VĀBhBV:　*Viśeṣāvaśyakabhāṣyabṛhadvṛtti*（Maladhāri Hemacandra）: *Śrījinabhadragaṇikṣamāśramaṇapādaviracitam Viśeṣāvaśyakabhāṣyam / Maladhāriśrīhemacandrasūriviracitayā śiṣyahitānāmnyā Bṛhadvṛttyā vibhūṣitam.* Śrī Yaśovijaya Jaina Granthamālā, nos. 25, 27, 28, 31, 33, 35, 37, 39, Benares, 1911-15.（Reprint. Bhuvanabhānu Sūri, ed. *Viśeṣāvaśyakabhāṣya*. 2Vols. Reprint. Mumbai: Divya Darśan Trust, 1982.）

＊本稿は、筑紫女学園大学・短期大学部平成24年度特別研究助成費（一般研究）による研究成果の一部である。なお共同研究者である佐藤宏宗博士（東方研究会・研究員）、藤永伸博士（都城高専・教授）、河崎豊博士（大谷大学・助教）、小林久泰博士（筑紫女学園大学・人間文化研究所・リサーチアソシエイト）、上田真啓氏（京都大学大学院）からは、数々の助言を頂いた。ここに記して謝意を表したい。

注

[1] ジャイナ教では伝統的に、実体的ナヤ（dravyāstikanaya）・様態的ナヤ（paryāyāstikanaya）をはじめとする二分類、ナイガマ（naigama）をはじめとする七分類など数々の分類法が知られている。これらの分類法は、文献により様々な相違があり、かつその内容についても異説が見られる。本稿では、ナヤそのものの定義文のみを取り上げることとし、ナヤの分類法および細分類された個々のナヤについては取り扱わない。ナヤの分類については、Matilal［1981］、宇野［1990］などを参照されたい。

[2] なお、ジャイナ教では「スヤードヴァーダ」（syādvāda）もナヤと共に積極的多面説を補強する両輪とされ、「七文陳述法」（saptabhaṅgī）という表現形式を以て多面的な対象について述べることを意味する。このスヤードヴァーダはサマンタバドラなどの論師によってプラマーナと同一視されるに至るが、スヤードヴァーダとプラマーナの関連およびスヤードヴァーダとナヤの関連については今後の課題としたい。スヤードヴァーダについては、宇野［1965］、Matilal［1981］、藤永［1985］を参照されたい。

[3] See JTBh, p.21: pramāṇaparicchinnasyānantadharmātmakasya vastuna ekadeśagrāhiṇas taditarāṃśāpratikṣepiṇo 'dhyavasāyaviśeṣā nayāḥ /.

[4] Cf. TAS 1.6: pramāṇanayair adhigamaḥ //.

[5] See SAS on TAS I.6: nayaśabdasya alpāctaratvāt pūrvanipātaḥ prāpnoti / naiṣa doṣaḥ / abhyarhitatvāt pramāṇasya pūrvanipātaḥ / abhyarhitatvaṃ ca sarvato balīyaḥ / kuto 'bhyarhitatvam, nayaprarūpaṇaprabhavayonitvāt / evaṃ hy uktaṃ “pragṛhya pramāṇataḥ pariṇativiśeṣād arthāvadhāraṇaṃ nayaḥ /”.

[6] プージュヤパーダが引用する韻文の作者については、全くの不明である。注釈元であるウマースヴァー

ティの『タットヴァ・アルタ・スートラ』やその自注にもプラマーナとナヤの関係は明言されることがないので、ウマースヴァーティ以降プージュヤパーダ以前のある空衣派論師がこの解釈の嚆矢と考えてよいであろう。

[7] 例えばアカランカによるプラマーナの優位性についての言明は次の通りである。Cf. TARV on TAS I.6: abhyarhitatvāt pramāṇaśabdasya pūrvanipātaḥ // “abhyarhitaṃ pūrvam nipatati” iti pramāṇaśabdasya pūrvanipāto veditavyaḥ / katham abhyarhitatvam, pramāṇaprakāśiteṣv artheṣv nayapravṛtter vyavahārahetutvād abhyarhaḥ // yataḥ pramāṇaprakāśiteṣv artheṣu nayapravṛttir vyavahārahetur bhavati nānyeṣu ato 'syābhyarhitatvam /. なお、アカランカ以後と目される『タットヴァ・アルタ・スートラ』に対する白衣派注釈者であるハリバドラ、シッダセーナ・ガニなどの言明もほぼ同意である。Cf. TASṬ(H) on TAS I.6, f.36: evaṃ ca kṛtvā pramāṇaśabdasyābhyarhitatvāt sūtre pūrvanipāta iti na codyāvakāśaḥ /; TASṬ(S) on TAS I.6, p.53. また、プラマーナの先行性については、次のマッリシェーナ（白衣派）の言明にも明示されている。Cf. SM on v.28, p.161: pramāṇapravṛtter uttarakālabhāvī parāmarśa ity arthaḥ /.

[8] Cf. PNT 7.1: nīyate yena śrutākhyapramāṇaviṣayīkṛtasyārthasyāṃśas taditarāṃśaudāsīnyataḥ sa pratipattur abhiprāyaviśeṣo nayaḥ //.

[9] See VĀBh 2651: egeṇa vatthuṇo 'ṇegadhammaṇo jam avadhāraṇeṇeva / ṇayaṇaṃ dhammeṇa tao hoti ṇao sattadhā so ya //.

[10] See ADSV(H), p.113: evaṃ nayanaṃ nayaḥ, nīyate 'nenāsminn asmād iti vā nayaḥ, anantadharmātmakasya vastuna ekāṃśapariccheda ity arthaḥ /.

[11] See TASṬ(S) on TAS I.6, p.52: ye hy anekadharmātmakaṃ vastv ekena dharmeṇa nirūpayanti etāvad evedaṃ nityam anityaṃ vetyādivikalpayuktaṃ te nayā naigamādayo vakṣyante //.

[12] See NU v.2: sattvāsattvādyupetārtheṣv apekṣāvacanaṃ nayaḥ / na vivecayituṃ śakyaṃ vināpekṣāṃ hi miśritam //.

[13] ナヤは基本的には知を本質とするが、その知をもたらす言語表現も転義的に「ナヤ」と呼ばれる。宇野［1990: 35-37］を参照せよ。

[14] 前掲PNTの定義も参照せよ。なお、空衣派においてもナヤが「認識者の意向」であることは様々な文献に明示されている。Cf. LTV, p.10: nayo jñātur abhiprāyaḥ /; SVin X. 1: jñātṛṇām abhisandhayaḥ khalu nayās … /.

[15] See SAS on TAS I.6: sakalaviṣayatvāc ca pramāṇasya / tathā coktaṃ “sakalādeśaḥ pramāṇādhīno vikalādeśo nayādhīnaḥ” iti /.

[16] 例えば、アカランカやヴィドゥヤーナンディンは次のように言う。Cf. TARV on I.6, p.33: pramāṇaprakāśiteṣv artheṣu nayapravṛtter vyavahārahetutvād abhyarhaḥ / yataḥ pramāṇaprakāśiteṣv artheṣu nayapravṛttir vyavahārahetur bhavati nānyeṣu ato 'syābhyarhitatvam / samudāyāvayavaviṣayatvād vā / atha vā samudāyaviṣayaṃ pramāṇam avayavaviṣayā nayā iti pramāṇasyābhyarhitatvam /; TAŚV on I.6, p.118: pramāṇaṃ sakalādeśi nayād abhyarhitaṃ matam / vikalādeśinas tasya vācako 'pi tathocyate //.

[17] See STP I.21: tamhā savve vi ṇayā micchādiṭṭhī sapakkhapaḍibaddhā / aṇṇoṇṇaṇissiā uṇa havaṃti sammattasabbhāvā //.

[18] Cf. STP III.48: jaṃ kāvilaṃ darisaṇaṃ eyaṃ davvaṭṭhiyassa vattavvaṃ / suddhoaṇataṇaassa u parisuddho pajjavaviappo //.

[19] シッダセーナ・ディヴァーカラは、実体的ナヤ（dravyāstikanaya）に基づく「一面的常住論」（nityaikāntapakṣa）、様態的ナヤ（paryāyāstikanaya）に基づく「一面的無常論」（anityaikāntapakṣa）のいづれもが、輪廻・解脱という二つの現象と齟齬を来すことを指摘している。Cf. STP I.18: suhadukkhasampaogo ṇa jujjae ṇiccavāyapakkhammi / egaṃtuccheyammi ya suhadukkhaviyappaṇam ajuttaṃ //（［一面的な］常住論の見解、さらに一面的断滅論［の見解］によれば、［ジーヴァが］楽・苦と結びつくことは妥当しない。［同様に、いづれの見解によっても］楽のため、また苦［を離れる］ために努力することは妥当しない。）。

[20] See VĀBh vv.2740-1: jam aṇegadhammaṇo vatthuṇo tadaṃse vi savvapaḍivattī / aṃdha vva gayāvayave to micchaddiṭṭhiṇo vīsuṃ // jaṃ puṇa samattapajjāyavatthugamayanti samuditā teṇa / sammattaṃ cakkhumato savvagayāvayavagahaṇe vva //.

[21] Cf. TBV on STP I.21: atha teṣāṃ pratyekaṃ mithyātve bandhādyanupapattau samyaktvānupapattiḥ sarvatrety āha ---- anyonyaniśritāḥ parasparāparityāgena vyavasthitāḥ punar iti ta eva samyaktvasya yathāvasthitavastupratyayasya sadbhāvā bhavantīti na bandhādyanupapattiḥ /.

[22] See VĀBhBV on 2270: niravadhāraṇo 'paranayasāpekṣaḥ syātpadalāñchita eko 'pi nayaḥ samyagvādī, ye tu sāvadhāraṇā anyonyam anapekṣāḥ syātpadālāñchitās te bahavo 'pi samuditā mithyādṛṣṭaya evetīha tātparyam /.

[23] Cf. Matilal［1981: 52-53］. Matilalは‘syāt’を「条件付き承認」（conditional approval）と解し、文章に表現された主張の肯定／否定に、「ある点では」「ある視点から見れば」「ある条件下では」という形で制限を加えるものと解釈している。なお, サマンタバドラによれば、‘syāt’は「多面性の表示者」（anekāntadyotī）と解される。Cf. ĀM v.103: vākyeṣv anekāntadyotī gamyaṃ prati viśeṣakaḥ / syānnipāto 'rthayogitvāt tava kevalinām api //; 藤永［1990: 77］.

[24] See ĀM v.108: mithyāsamūho mithyā cen na mithyaikāntatāsti naḥ / nirapekṣā nayā mithyā sāpekṣā vastu te arthakṛt //. 当該箇所は、藤永［1990: 78］に和訳されている。

[25] See LT v.30: bhedābhedātmake jñeye bhedābhedābhisandhayaḥ / ye te 'pekṣānapekṣābhyāṃ lakṣyante nayadurnayāḥ //.

[26] アカランカは、サマンタバドラの『アープタ・ミーマーンサー』第106詩節に対する注釈箇所において、次の韻文を記述しており、彼以前に劣ったナヤについて言及する論師が居た可能性がある．Cf. AŚ on ĀM v.106: tathā coktam ---- arthasyānekarūpasya dhīḥ pramāṇaṃ tadaṃśadhīḥ / nayaḥ dharmāntarāpekṣī durṇayas tannirākṛtiḥ //（「プラマーナとは、複数の本質を持つものについての知である。ナヤとはその一部の知であり、かつ［その一部とは］別のダルマを考慮するものである。劣ったナヤとは、それ（別のダルマ）を否定するものである。」）。なお、アカランカに先行する『アープタ・ミーマーンサー』に対する注釈者ヴァスナンディン（空，ca. 650-700）は、同じ第106詩節に対する注釈箇所では「プラマーナとは多面性の知であり、ナヤとは一つのダルマの知である」（ĀMV on ĀM v.106: anekāntapratipattiḥ pramāṇaṃ, ekadharmapratipattir nayaḥ /）とのみ述べており、劣ったナヤについては何ら言及しない。したがって、劣っ

たナヤについて初めて言及するのは、ヴァスナンディン以降アカランカ以前の無名の空衣派論師である可能性が高い。

[27] See AŚ on ĀM v.108: nirapekṣatvaṃ pratyanīkadharmasya nirākṛtiḥ / sāpekṣatvam upekṣā anyathā pramāṇanayāviśeṣaprasaṅgāt / dharmāntarādānopekṣāhānilakṣaṇatvāt pramāṇanayadurṇayāṇāṃ prakārāntarāsaṃbhavāc ca /.

[28] この知の内容の区別は、以下の『アシュタシャティー』を参考にした。なお、ヴィドゥヤーナンディンの『アシュタサハスリー』も参照せよ。Cf. AŚ on ĀM v.108: tadatatsvabhāvapratipattes tatpratipatter* anyanirākṛteś* ceti viśvopasaṃhṛtiḥ / (AŚ: tatpratipattir anyanirākṛtiś, ASに基づいて訂正); AS on ĀM v.108 and AŚ, p.291: pramāṇāt tadatatsvabhāvapratipatter nayāt tatpratipatter durṇayād anyanirākṛteś ca / iti viśvopasaṃhṛtiḥ, vyatiriktapratipattiprakārāṇām asaṃbhavāt /（「プラマーナによってXおよび［それと対立する］非Xという本質についての知があり、ナヤによってX［という本質］についての知があり、劣ったナヤによってX以外の否定があるから。以上のように、［知のあり方］全てが纏められる。［これら三者］以外の知のあり方はあり得ないからである。」）。

[29] ナヤと劣ったナヤの対比については、次のプラバーチャンドラの定義にも明確に提示されている。プラバーチャンドラが劣ったナヤを「疑似ナヤ」（nayābhāsa）と呼んでいることは。白衣派論師たちと共通しているという点で興味深い。Cf. PKM, p.676: tatrānirākṛtapratipakṣo vastvaṃśagrāhī jñātur abhiprāyo nayaḥ / nirākṛtapratipakṣas tu nayābhāsaḥ /.

[30] Cf. TASṬ(H) on TAS I.6, f.36: apare varṇṇayanti ---- parasparāpekṣayā naigamādayo nayā iti vyapadiśyante adhyavasāyās taiḥ parasparāpekṣair jñānaṃ samastavastusvarūpālaṃbanaṃ janyate, tad anavagatavastupariccheda-bhyupāyatvāt pramāṇaṃ, ye punar naigamādayo nirapekṣāḥ parasparena te nayābhāsā iti /; TASṬ(S) on TAS I.6, p.53.

[31] See PNT 7.2: svābhipretād aṃśād itarāṃśāpalāpī punar nayābhāsa iti //. デーヴァ・スーリは自注『スヤードヴァーダ・ラトナーカラ』において、疑似ナヤを劣ったナヤと同一視している。Cf. SVR on PNT 7.2, p.1047: nayābhāso nayapratibimbamātraṃ durnaya ity arthaḥ /. なお、次のマッリシェーナによる「劣ったナヤ」についての言明も「他の諸々のダルマを否定する」という点で誤りであることを明示している。Cf. SM on v.28, p.159: ayaṃ vastuny ekāntāstitvam evābhyupagacchann itaradharmāṇāṃ tiraskāreṇa svābhipretam eva dharmaṃ vyavasthāpayati / durnayatvaṃ cāsya mithyārūpatvāt / mithyārūpatvaṃ ca tatra dharmāntarāṇāṃ satām api nihnavāt /.

[32] デーヴァ・スーリは『パリークシャームッカ』などの空衣派作品に倣って自著『プラマーナ・ナヤ・タットヴァーローカ』を造っており、数々の空衣派論者の影響を受けている。特にPNT第７章に詳述されるナヤ解釈において、ヴィドゥヤーナンディンの『タットヴァ・アルタ・シュローカ・ヴァールティカ』が大幅に引用されている。デーヴァ・スーリに対する空衣派の影響については，Dixit［1971: 158-160］を参照せよ。

[33]『タルカ・バーシャー』のナヤ章だけに限らず、ヤショーヴィジャヤはデーヴァ・スーリの『プラマーナ・ナヤ・タットヴァーローカ』および自注である『スヤードヴァーダ・ラトナーカラ』を全面的に利用している。JTBh刊本の脚注を参照せよ。なお、ヤショーヴィジャヤに対するヴィドゥヤーナンディンの間接的影響については、Dixit［1971: 161-2］を参照せよ。

[34] 例えば、次のような疑似ナヤの定義を参照せよ。Cf. JTBh, p.24: tatra dravyamātragrāhī paryāyapratikṣepī dravyārthikābhāsaḥ / paryāyamātragrāhī dravyapratikṣepī paryāyārthikābhāsaḥ /; vartamānaparyāyābhyupagantā sarvathā dravyāpalāpī ṛjusūtrābhāsaḥ, yathā tāthāgataṃ mataṃ /.

（うの　ともゆき：日本語・日本文学科　准教授）